
サーカス

向山 葉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サーカス

【Nコード】

N5522W

【作者名】

向山 葉子

【あらすじ】

『サーカス、来る！』と大見出しのついた折り込み広告の文字が目飛び込んできた。……

【初出】月刊「武州路」平成二年一月号（通巻一九七号）

【再録】ウェブサイト「西向の山」平成十五年七月

サーカス

向山 葉子

「サーカス、来る！」と大見出しのついた折り込み広告の文字が目
に飛び込んできた。私はとっさにそのサーカス団の名前に目を走ら
せた。『Bサーカス』という外国の有名なサーカス団の名前が記さ
れてあった。もちろん、私が期待した名前ではない。サーカス、と
いう言葉を私はかつてある一時、熱病に取り憑かれたように（実際
熱があつたのだが）繰り返して思っていた時期がある。そのサーカス
団の名は、茂草サーカスといった。初めにその名を私に伝えたのは、
仲良しの笹美ちゃんだった。私達は同じ小五で、家も近く、よきラ
イバルでもあった。

「サーカスが来るんだって。三丁目の児童公園。茂草サーカスって
いうのよ」

色とりどりに印刷されたビラを見せて、笹美ちゃんはそう言った。
真ん中に玉に乗ったピエロが描かれており、上にはブランコに足を
絡ませてさかさになった少女が笑っていた。下には古風な文字で、
本邦初公開の至上の芸の数々、茂草サーカス、と書かれてあった。
だがその三日後、公演初日に私は四十度近い熱を出して寝込んでし
まった。しかたなく笹美ちゃんは一人で行くことになった。

笹美ちゃんは、紅潮した頬で帰ってきた。すごい、すごい、を連
発しながら。

「鏡を通り抜けたりするの。女の子がね、初めは手を鏡の中に入れ
たり出したりするの。それから、体ごと入っちゃうんだから……」
……大きなテントの入り口で赤と銀の縞模様の派手な衣装をつけ

た。ピエロが盛んに手招きをしている。左手に持った糸の先には、赤や黄色や青や水玉や紫や様々な風船が揺れている。ピエロは子供達におどけた仕種でそれを渡している。風が吹く。一つの風船が群れを離れてふわりと浮き上がる。あ、と私は声を上げる。私が一番欲しかった銀地にピンクの水玉の風船だったのだ。私は遠ざかっていく風船をいつまでも見つめている。

「嬢ちゃん、あれがよかったの？ ああ残念だったね。でもご喝采あれなら中にいっぱいあるよ」

ピエロは私の頭を撫でながら優しく言う。

「一緒に入ってみる？」

私は頷く。ピエロは私の手を取って、皆が入っていく入り口とは違う小さな入り口に誘っていく。中はとても暗い。私はちよつと躊躇う。がピエロが背を軽く押すと私は闇の中に吸い込まれてしまった。滑り台を滑るようにどんどん落ちていく。突然明るくなる。私の欲しかった風船が一面にふわふわと舞っているその上に私は落ちてきたのだった。

「やあ、待っていたよ。早速練習だ」

肩幅の立派な背の高いお兄さんが、私の手を取る。斜めに張った綱がずつとテントの頂上（それはずつと高くて見えない程だ）まで続いている。これを登るのだという。私は出来ない、と首を振るのだが、お兄さんはもう見本を示そうと綱の上である。お兄さんの足は魔法の足だ。長い足指を器用に綱に絡めて登っていく。お兄さんは手招きをする。私は首を振る。手招きする。手招きする。優しい笑顔で。私は靴と靴下を脱いで、仕方なく綱の前に立つ。

「ホラ、そんな長い足の指を持つてるんだから大丈夫。乗ってごらん。君はすぐスターだ」

私はおそろおそろ綱に足をかける。不思議なことだ。私の足はすぐに綱に馴染んでしまった。まるで綱の方で、私を登らせようとしてくれているようだ。私は嬉しくなった。今までこんなに上手く出来たものがあつたかしら？ すいすいと私は登っていく。お兄さ

んが待っていて、私の手を柔らかく握ってくれる。あつたかい手。私の不安は微塵になる。胸を張って堂々と、私は登っていく。突然、スポットライト！ きらきら光を蒔くミラーボール。私の服をお兄さんがつつと引つ張ると服はばらけて、華やかな縫い取りのある紗の衣装に早変わりする。鳴り響くドラムの音。

『天才少女による縦綱渡りの妙技！ 本邦初公開！ 上手くいきましたらご喝采！』

私は微笑む。息を詰めて見つめる観客の顔、顔、顔。やがて頂上まで辿りつく。そこで私とお兄さんは煙のように消えるのだ……。うなるようなどよめき、鳴り止まない拍手

私は四日も夢現だった。熱が引いてから、笹美ちゃんが引越していつてしまったことを聞いた。枕元には銀地にピンクの水玉の風船が天井につつかえながら糸を垂らしていた。笹美ちゃんのプレゼントだった。

児童公園には、もうサーカスの跡形もなかった。紙吹雪に使ったと思われる紙屑が僅かに風に吹き上げられているばかりで。老人が一人、近付いてきて言った。

「嬢ちゃん。もうサーカスは行っちゃったよ」

(了)

(後書き)

掌篇小说『サーカス』 向山葉子

【初出】月刊「武州路」平成二年一月号(通卷一九七号)

【再録】ウェブサイト「西向の山」平成十五年七月

(C) 1990 Mukouyama Yoko

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5522w/>

サーカス

2011年9月9日16時00分発行